

地域とつながるにほんご交流会の実践

—地域住民との交流を通して大学日本語学習者にもたらされる効果—

山口麻子・岡田千帆・市村佳子・亀井信一

要旨

2021年より地域の国際交流センターと大学日本語プログラムとの協働で開催しているにほんご交流会参加学生にもたらされる内面的変化を、アンケート調査をもとに分析してみた。その結果、「モチベーションの向上」と「学生自身の社会経験の広がり」という主に二つの効果が見られた。本交流会は、外国人学生が日本語を使って地域社会に羽ばたいていく自信と経験を育てる貴重な機会であることを紹介したい。

キーワード

対等な関係、主体的な学び、殻を破る経験、価値観の広がり、自信

1. にほんご交流会の背景と概要

せたがや国際交流センターは2020年に設立され、日本人住民と外国人住民が互いの文化について理解を深めるための講座や交流イベントを開催している。一方、2020年に世田谷区にキャンパスを移したテンプル大学ジャパンキャンパスは語学以外の授業が英語で行われるため、学生たちが日本語を使う機会が少なく、社会や地域とのつながりが希薄だった。地域との繋がりを求めて、2021年より当センターと協働で、にほんご交流会を1年に5回程度実施している。日本人参加者は、区報での告知や、せたがや国際交流センターのホームページ、メールマガジン、チラシなどで募っているが、毎回定員を超える応募者があり、参加者は抽選で決められている。大学側から参加する外国人学生は、クラスとして参加する学生と、他の日本語クラスからの自由参加の学生がいる。2023年3月から2024年12月までの8回で、日本人210人、外国人257人の延べ467人が参加している。交流会は土曜日の午後2時間で、最初の1時間は本学のクラス活動の発表をし、次の1時間はグループに分かれて会話を楽しむ。

2. にほんご交流会の理念

2.1 日本人と外国人の対等な関係

外国人の学生たちはプロジェクトの発表を行い、地域の日本人は「やさしい日本語」を使って会話する。プロジェクトでは、学生たちがフィールドワークで地域を調べて発見した魅力を伝えたり、自分の国について紹介したり、自分たちが考える日本の魅力や体験を伝えたりするなどの発表を行っている。外国人が日本人に日本語を教えようという強者と弱者の関係ではなく、日本人が外国人の考え方を知り、意見交換するというものである。

石井（2010、p. 32）は「対話の場とは、参加者自身のもつ内容・メッセージを伝え合う活動を通して、日本語コミュニケーション能力を向上させ、人間関係を作る場である」と

述べている。にほんご交流会では、学生が世田谷区について調べたことや感想をポスター発表すると、地域の参加者から「地元なのに知らなかった」との感想を得るとともに、「実はここは…」と新しい情報もたらされることもある。一つのテーマに対して意味のあるコミュニケーションが行われ、メッセージを伝え合うという石井の勧める対話の場が発生している。にほんご交流会のあとには、グループメンバー同士で連絡先を交換し、のちにカフェで会う約束をしたという学生もあり、その後の人間関係の広がりにも寄与している。

一方、石井（2010）は対話の場を実現するには、日本語教育の専門家によって参加者の最低限の日本語能力を育成することが必要だとも述べている。会話が成り立たなければ、対話の場が機能することができないためだ。本学では、ゼロ初級から上級まで様々なレベルの 40 以上の日本語クラスが毎学期開講されており、日本語教育の大学院以上の資格を持つ経験豊富な教員が各クラスを担当している。石井（2010）が述べるように、文法・語彙知識の知識的学習活動から対話は生まれにくい、クラス履修によりベースとなる日本語能力を習得した学生にとって、にほんご交流会で地域の人々と対話することは重要な補完機能であり、教育的にも理想の形であると考えられる。そのため、クラス履修者には「Extra Credit」というボーナスポイントを付与し、積極的な参加を促している。参加する最初の動機がボーナスポイントでも、その後継続して参加する学生も増えており、学生達にもこの交流会が定着してきている。

2.2 主体的な学び

溝上（2018）は学習者が自主的な積極性を持ち、自らの学びを認知しながら学習を進めていくことが、主体的な学習であるとしている。交流会は自由会話がベースになっているため、知識伝授型の教室活動のように決まった答えがなく、学生が主体的に取り組まなければならない。学生が自分の経験や視点を日本人参加者と共有し対話することで刺激を受け、自らの学習につなげていくのである。交流会に参加した学生からは「日本語のレベルはまだ」「語彙の少なさを実感した」「リスニングに問題があったので、聞く練習をもっとしなければいけない」などの感想もよく聞かれる。この活動が教師のお仕着せではなく、学習者自らが必要性を認知して日本語学習の動機を高め、日本語や日本文化に対する気付きを得る認知プロセスを経て、主体的な学びを得る絶好の機会になっている。

3. にほんご交流会の実践と効果

ここでは、にほんご交流会が、参加した学生からどのような評価を受け、どのようなコメントを得たか示したい。2024 年 3 月 30 日、10 月 24 日、11 月 23 日に参加した学生合わせて 83 名からアンケートの回答を得た⁽¹⁾。まず、にほんご交流会全体への評価を 5 段階で評価してもらったところ、平均で 4.5 点と高い評価となった。理由を尋ねると、「ネイティブと話すよい練習」「普段話せない人と交流できる」「初めてだったので怖かったが、みんな優しく楽しく話せた」という声があった。初級の学生の中には「自分の殻を破って挑戦し、心配なく日本語を話せた」と回答した学生もいた。当該学生は、日本語の勉強を始めてまだ 3 ヶ月弱で熱心に教室活動や宿題に取り組んでいたが、動詞の活用や助詞の使い方に苦戦し正しい日本語ができないと悩んでいた。日本人と話してみようと勇気を振り絞って挑戦し、手ごたえをつかめたことは喜ばしい。この学生は交流会のあとにほかの二人

のクラスメートと共に教員たちのもとに来て「私たちはもっとこのような活動が必要です。1ヶ月に1回ぐらい開催してほしいです。」と要望を伝えた。交流会のグループメンバーの日本人とのちに会う約束をしたとのことで、このような積極的な姿勢と努力によって日本語力の向上のみならず、日本社会への理解や適応、関わる日本人への異文化理解の促進につながるのではないだろうか。

次に、交流会の意義を尋ねると、71人、86%の学生が「このような地域の日本人と話す活動は、非常に意義がある」と回答している。意義を感じたからこそ参加したということも考えられるが、クラスとして強制的に参加することとなった学生、ボーナスポイントを動機として参加した学生がいることも考慮すると、この高い評価は注目に値する。

では、学生たちはなぜ意義があると考えたのだろうか。理由は大きく3点に集約できる。第一に、日本語の練習である。にほんご交流会では、6人から8人ほどの日本人と外国人混合のグループになり、組替えを挟んでフリートークで約1時間話し続ける。「ネイティブと話すことは日本語の練習に重要」「教科書の日本語と実際の日本語の違いがわかる」「日本語を話す自信がつく」などの回答にみられるように、教室で教師相手ではなく生の日本人との会話が貴重だと感じる学生が多い。第二に、出会いである。「留学生として日本人と話す機会があまりないので、交流会は貴重な良い機会だ」「普段話せないような人たちと繋がれた」「地域の色々な経験をもった人々と知り合えた」「テンプル大学は英語の環境なので、このようなイベントに参加して自分のソーシャルサークルから踏み出すことが重要だ」などの意見が出された。教室でもよく聞かれるのが「お店やレストラン以外で日本語を使うことが少ない」「日本人と友達になるのが難しい」という声だ。このようなネイティブとの接点の少なさは日本に限らず他の国にも共通することだろう。筆者の中にも海外留学の経験者がいるが、自分から積極的に地域に出ていかなければ交流することは難しい。にほんご交流会は本学のラウンジで行われるため、いわば学生たちの日常の居場所に地域の日本人が来てくれるのである。やみくもに出会いを求めて外に行くより、より気軽な気持ちで交流できる。第三は、交流を通じた学びである。「日本文化や社会について学んだ」「グループのそれぞれが互いの文化に関心を持ち多くのことを話せた」「様々な文化背景を持つ人と交流することは、私たちの経験や知識を広げてくれる」「異なる文化の人と交流して、世界観が広がった」と価値観や世界観が広がったという声が聞かれた。その一方で「互いの共通点が多いことに気が付いた」「日本人と外国人の間に多くの類似点があったことに驚いた」という感想もあった。交流会では、教える人、教わる人という強者弱者の関係ではなく、対等な関係があったからこそ、共通点が多いことに気付くと共に、価値観の広がりを感じたと考えられる。

さらに、にほんご交流会に参加したことによる心境の変化について選択肢をあげて複数回答で選んでもらったところ、「地域の日本人ともっと話したいと思うようになった」は58人で36%、「日本語をもっと勉強したいと思うようになった」は53人で33%、「思ったより日本語を話せたので自信がついた」が38人で24%、「考えや心境の変化はない」が9人で5%、「その他」が3人(1%)という結果であった。心境の変化がなかった学生のデータを見ると、上級ですでに日本語を話す機会が豊富だという学生が多かった。多くの学生は、日本語を授業外で話すことに自信がつき、もっと地域の人と話そうと思い、日本語をもっと勉強したいと思うようになったという好循環が見える。

最後に、「心境の変化があった場合、どのように将来の生活や行動に移そうと思いますか」と自由回答で尋ねたところ、「教室の中だけでなく、日常生活の中でも日本語を学ぼうと思う」「話すことに自信がついたので、もっと積極的に知らない人と話したい」「間違っても大丈夫なことがわかったので、もっと話したい」「話すことで日本語を上達したいというモチベーションがあがった。日本語を頑張りたい」「もっと外に出てソーシャライズしたい」というコメントがあった。教室の外で間違いを恐れずにどんどん話し、友達を作っていきたいと答える学生が多くみられ、その気持ちを持ち続けてほしいと思う。

4. まとめと今後の課題

以上、テンプル大学ジャパンキャンパスとせたがや国際交流センター協働のにほんご交流会に参加した学生のアンケートをもとに、その効果を見てきた。交流会については、5点満点で平均が4.5点、交流会の意義については4.8点と非常に高い評価を得ている。日本に住んでいながらも日本語を話す機会が限られている学生たちにとって、この交流会は、学んできた日本語を試す貴重な機会であり、出会いの場でもある。このような体験により二つの効果が見られた。一つ目の効果は「モチベーションの向上」である。自分が思ったより話せたという成功体験、日本人が思ったより優しいという発見により、日本語が完璧でなくても地域の人と話してみようという意欲に繋がっている。それが日本語をさらにがんばろうという動機付けになり、日本語能力の向上と地域との繋がりが強化されることが期待される。

もう一つの効果は、「学生自身の社会経験の広がり」である。アンケートでは、自分の殻から外へ踏み出す第一歩になっているというコメント、日頃話すことのない経験豊富な中高年の地域の日本人と話すことで、自分の経験値があがる体験になっているという声もあり、地域や日本社会と繋がるきっかけになっていることがわかった。

このように、参加している学生への効果は顕著であり、その効果がわかって継続参加する学生も出てきているが、本学の日本語学習者が年間延べ約 1500 人であることを考えると、参加人数は1割強と一部に過ぎない。今後は、より多くの学生の参加を促し、継続参加学生の内面の変化や日本語力の変化等を分析することで、継続参加の効果を実証していきたい。

(山口麻子・やまぐちあさこ・テンプル大学ジャパンキャンパス)
(岡田千帆・おかだちほ・テンプル大学ジャパンキャンパス)
(市村佳子・いちむらよしこ・テンプル大学ジャパンキャンパス)
(亀井信一・かめいのぶかず・せたがや国際交流センター)

注

1. アンケートは英語で行われ、日本語の訳は筆者による。また、回答やコメントを学会や論文で使用するについては、事前に承諾を得ている。

参考文献

- 石井恵理子 (2010) 「多文化共生社会形成のために日本語教育は何ができるか」『異文化間教育』32, 24-36.
- 溝上慎一 (2018) 『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』東信堂